

# 岐阜地鶏

岐阜県岐阜地鶏保存会

後 藤 勝

岐阜地鶏は日本古来のニワトリの一種。平安時代から徳川初期にかけ中国やシャム（今のタイ）から小国鶏、蜀鶏、烏骨鶏、軍鶏、矮鶏等種々の鶏が海外より入るに及び、新しく渡来した鶏との区別をする為に、此等の在来種を地鶏と呼ぶ様になった。

地鶏類は、有史前の弥生時代から飼われて来た最古の日本鶏で、江戸時代の品種改良や、外国産との交配などで独特な品種が作出されたなかで、逆に、原種の特徴を保持してきた鶏です。

現在我国には約四十品種、百三十内種などが先人達の

努力により改良され固定化されました。此等の世界的にも貴重な鶏も充分な国の助成もないため年々減少しつつあり、殆んどが熱心な篤志家により小羽数ずつ育てられているだけで危機にきています。

因では、この文化遺産保護のため、十七品種の日本鶏を天然記念物に指定はして居ります。地鶏はその内の八番目に昭和十六年一月二十七日、主たる生息地三重県、高知県、岐阜県で文部省より地鶏（じどり）の名で指定を受けました。

三重県産の地鶏は、伊勢地鶏とか羽色から来る伊勢狸々、赤腹、狸々地鶏などと呼んでいたが、天然記念物指定に申請した名称は「狸々地鶏」であり、最近の品評会などでは産地名の三重地鶏の呼び名を多く使うが、正式な公文書又はそれに準ずる場合、品評会の賞状等には狸々地鶏の呼び名が正しい名称である。

高知県産の地鶏は赤笹羽色の小型な鶏で矮鶏と体重が殆んど同じで、三重、岐阜地鶏が普通地鶏型と言われる雄四八〇匁（一、八〇〇g）雌三六〇匁（一、三五〇g）に対し、高知県産は、雄一八〇匁（六七〇g）雌一六〇匁（六〇〇g）と前者に比べ半分の体重もない為、地名と体の大きさから来る、土佐の小地鶏と呼ぶ。

岐阜県産の地鶏は、赤笹地鶏と言う呼び名が正しいが、



谷口与鹿作 地鶏彫刻（元禄）

指定当時岐阜県は郡上郡地方に飼育が多かった為、郡上地鶏の呼名があったが、岐阜県産との事で指定を機会にその名称を岐阜地鶏と一般に呼ばれる様になった。

岐阜地鶏には、赤笹種と黄笹種の二種類が有り天然記念物の指定を受けたのは、赤笹羽色である。

赤笹、黄笹と言うのは、雄鶏の頸羽（首筋の下の方の羽根）と鞍羽（背中から尾羽の方向に向きたれる羽根、衰羽とも言う）の先が笹の葉の様に、黒に赤又は黄色の覆輪があり、竹の笹葉に似る処から赤笹、黄笹と羽根の色で区別して呼ぶのである。赤笹種は、東南アジアなどの密林などに生息している赤笹野鶏に最も近いと言われる鶏である。赤色野鶏と赤笹地鶏との結び付きは、私達大和民族の祖先達が幾千年かの昔、東南アジア、中国、朝鮮等を経て現在の日本国に渡来して来た時、人と一緒に関へ来たと言うのだ。学者の方々や日本鶏愛好家達の間では、岐阜地鶏渡来説の経路に付き色々理論されている。天然記念物指定の三種の地鶏の他、地鶏と名称の付く日本鶏は、各地に居る。先ず代表的な鶏だけ南西の方角から拾い特徴を上げて見ると、次の順序となる。額沖繩県に琉球地鶏又は沖繩地鶏と呼ばれる鶏が居る。額に髯がある為髯地鶏とも呼ぶ。羽色は、赤笹と白笹の二種類があると聞くが、私が現在飼育の白笹と言って居る

て頂いた鶏は、雌の羽色は体中の羽根が黒で首の頸羽の所にだけ白の笹状の羽根がある。白藤小園、白笹薩摩鶏、白笹矮鶏等の雌の羽色とは違い、銀笹種である。体の大きさは、岐阜地鶏等と同じ普通地鶏だが、顔にヒゲがあり、脚色は黄色で地鶏の特徴である細身の体型では無く、



駒井源崎作 赤笹地鶏図（寛政）

大変巾のある太い体をして居る。

次に鹿児島県は、トカラ列島に、赤笹羽色のトカラ地鶏が居る。雄は、赤笹と言うより油赤に近い。雌の場合、岐阜地鶏と同じ茶褐色の現在私達が黄笹と誦す羽色と、梨地色の二種類が居る。脚色は、黒に近い楊柳色である。

四国に來ると前述のトカラ列島の小地鶏、赤笹羽色が居る。本場高知県では、油赤羽色の様な濃い赤羽根の鶏を良しとする傾向がある様だ。同じく高知県には、宮地鶏と呼ぶ鶏が居り羽色は黒で、眼は赤栗色、耳朶が白く短脚種で、帯黒黄色の脚をしている。

本州に來ると、山口県に徳地地鶏と呼ぶ赤笹羽色の鶏が居る。岐阜地鶏に一番良く似た鶏であるが、頭冠が少し大きい事と、羽色が少し濃い点、体型が少し太く、尾羽が少々豊富な点が違う。岐阜地鶏の様以外で放し飼いにすると身軽で、五〇メートル以上も宙を飛び、岐阜県内を流れる長良川や、支流の吉田川を飛行する様な野生に近い鶏とは体型が違う様に思います。その他、三重県の狸々地鶏。長野県に、赤笹羽色の信州地鶏又の名を木曾地鶏と呼ぶ鶏が居る。脚色は、楊柳色である。一時絶種が伝えられたが、最近私達の鶏仲間が、木曾福島のお寺に無事飼育されて居るのを確認して來て居る。

新潟県には、狸々羽色の芝鶏と、顔に髯のある、佐渡のヒゲ地鶏狸々羽色の二種が居る。三重県産狸々地鶏より新潟産の二種の羽色は薄く、体型も小さい。以上各地域に残った主な地鶏を上げて見ましたが、此の種の中にも地鶏と呼ぶには一寸首を傾げる物も居ます。

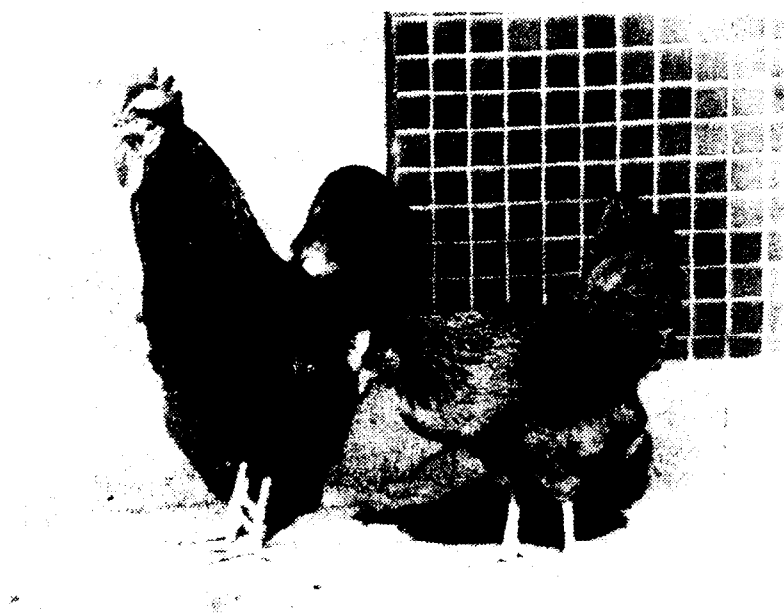
地鶏の絶対条件の一つは、最初にも述べました通り、

平安時代以前の在来種を地鶏と呼ぶのですから、交通の便、環境の悪い僻地で発見された鶏が多く、その土地の地名が品種としての「地鶏」とは異っているのは言うまでもありません。岐阜地鶏と赤色野鶏は、トカラ地鶏、土佐小地鶏、徳地地鶏等赤笹種が長い年月に少しづつ特徴が変化しているが、先祖は同じ「赤色野鶏」で大和民族の祖先が南方より来た足跡と同じであると説明する人が多い。

私も多くの赤色野鶏を拝見しているが、野鶏とは、外型は非常によく似ているが、一つ一つ羽根数や羽根の長さ、脚の色など深く調べてゆくと、双方に一致せぬ箇所が少くないのである。赤色野鶏を二千年か三千年前人間が捕え育てたと考え、羽根の数が多くなったり、脚の色が黒鉛色から楊柳色、ドロ脚、黄脚までの大きな進化をするのだろうか、疑問は多い。

全国の各地、群馬、栃木、静岡、奈良県などから出土した埴輪の鶏などから推定して、人間と鶏が共に生活を始めたのが弥生時代頃となる訳である。前にも述べたが、人間が日本に渡来した時ニワトリも一緒に来たと言う事が成立すると、それ以前には我々には野生の鶏などは生存していなきことになる。人類が誕生して最初の石器時代、食物の食べカスを捨てた日塚から、ススメ、カラス、

ハト、キジ、シカ、イノシシ、クジラの骨まで出て来る。当時の人は手当り次第食べたのであろう。全国各地の日塚からキジの骨は二千余りも出ているが、ニワトリの骨は無いと言われている。だがキジとニワトリの骨は殆んど変り無い同じ骨格である。其の骨を雑であると断定されてしまったものはなから出てあろうか。



第24回日本鶏全国展出品 岐阜地鶏(川野愛子氏)

科学の進歩した現在でも、野生の鶏を捕えて飼育する事は困難が多い。幾千年もの昔、何を目的に、その自暴しの人間が野鶏を首に何か興味深い事である。鳥が人と生活を共にして来た最初の目的は、肉を喰うとか卵を取ると言う考えでは無く、鳴音を聞くためだったらしい。

現代の様な灯りを使う事を知らぬ原始時代の闇夜の生活はどの様であったであろうか。自分達の居る身近で、強暴な野獣の足音や、鳴き声がしたら、肝を小さくして早く夜明けが来ないかと、恐れながら夜明けを待った事に違いない。その時、夜の明ける事の近いと言うことを告げるニワトリの一声が聞かれたら、人々は、鶏が神にも似た存在に思えた事に違いない。鶏は、夜の悪魔の力を破るものとして、守り神の象徴とし崇められた。鶏を身近に飼う様になった第一の目的は声であり、我國では古くから、暁を告げるものとして、お寺や、閑所、商家、農家では時計のなかつた時代、時を知る大切な役割をして来た。岐阜地鶏の場合、鳴声が特に美しく、日本鶏特有の澄みきった美しい音色で、コケコッコ、コウと謡ふ。最後にコウと言う返し鳴きをする点が他の鶏種と違う。一番鶏を午前四時(寅の刻)に正確に十二、三度謡うと昔から云う。その後は五時に三番鶏、六時に三番鳴きと、一時間の間を置き謡う。私の飼育鶏を五月の夏、何

時に謡い始めるが謡う。十日間毎朝、午前四時五分前に必ず鳴いた。私は他の鶏種を十五種ほど育てて居るが、他の鶏の鳴音に左右される様な事は殆んど無い。昔は時鶏と書き(しけい、じり)と読んでいた時代もある。鬮鶏や、食肉、食卵、見て楽しむ観賞目的は、時代が変り人間の生活も相当進歩してからである。

岐阜県が地鶏の生息地として指定を受けた当時は、その数も十羽を切るほどの少羽数が郡上郡の内部にいただけだと故人になられた閑市の古老で地鶏の保護に大変力を入れておられた村井定計翁にお聞きした事がある。

その昔は県内の各地農村や一般の庭の広い家では、屋根下の軒に鶏の寢床を造り、何所でも小羽数づつ放し飼いで育てていた。郡上八幡町小野に住んで居られた老婆に聞いた話だが「明治維新の頃は、城山の竹藪の中から雛を連れた地鶏がゾロゾロ出て来た」と話してくれた。

その頃には岐阜県下の何処にも居た様で卵や肉を得る大切な役割をもして居たが、四つ足動物と同じくニワトリは、神の使いと云う様な考えが一般にはあり、二本足の鳥の中でニワトリと呼んで鶏肉を食べず、病人が出て体の衰弱した人が出ると、これは「かしわ肉やで」と言っで食べたと言う。岐阜県では古い昔から現在でも、鶏肉屋の事をかしわ屋と呼ぶ。関東地方の軍鶏肉をカシワと

呼ぶのと訳が違う。神に詫びて鶏を食べる。打む時のかしわ手二を意味しているのかも知れないが、岐阜地鶏の雌の羽色を考える時、梨地色の野鶏（雌）と殆んど一緒の鶏と、黄笹または、昔から現在

でもカシワと呼ぶ体全体の羽色が黄茶褐色の二種類が居る。雄の銘鶏を作出する時、カシワの雌を使用すると羽色の明るい美しい鶏が出来る。

岐阜地鶏の場合、此の種の雌だけをカシワと呼んで来た事は、大昔は現在黄笹と呼ぶ、カシワ雌の方が多かったのではないか。梨地羽色雌は決してカシワとは呼ばない。雄鶏は食肉の対象とはならないので、かしわ屋とカシワ羽色の雌を考える時、梨地羽色は、後から出来たと言う創造論を出す人が少くない。鶏の祖先を知る時、脚色や眼色は大切な箇所である。岐阜地鶏の脚色は、濃い黄（

カラシ色）、普通の黄色（小国鶏と詞し）、泥脚と呼ぶ。東天紅鶏の楊柳色に似た色、楊柳色は、汚れた様な暗い脚色（赤色野鶏の黒脚より少し明るく）の鳥が居る。



後藤勝氏飼育 岐阜地鶏（昭和50年）

岐阜地鶏の審査標準から外された泥脚の鶏からは、脚の鶏からは絶対に出来ない美しい黄笹の鶏が仕上る。泥脚鶏の眼色は審査標準である赤栗色の鶏は出ない。銀

眼より暗い栗色である。因みに赤色野鶏の眼色を申し上げると真赤な美しい色である。審査標準から外された泥脚系の地鶏は古くから我県には居り、絶種の心配をされた地鶏の愛好家で、中沢五郎さんと言う御老人が、郡上郡の明方口に住んで居られる。もう五十年以上も此の鶏一本に打ち込み来られた真の地鶏愛好家である。泥脚の鶏は元々黄脚の鶏の中から生れるが、雌鶏は百羽に一羽位、雄の泥脚となると数百羽に一羽しか生れない。昔は多く居たが最近では、めっきり少なくなった。今更審査の標準を換える訳には行かぬ、私達地鶏愛好家に残された使命、研究課題の

岐阜地鶏の地鶏、ムラと、日本地鶏、カシワの人は、美

会員は、努力し地鶏の保護に励んで居ります。

濃地方の郡上だけを連想される方が多い様だが、飛騨の地方にも戦前から長く地鶏を飼育して来たところがあり、飛騨高山市に行くとき岐阜地鶏の古い彫刻や絵が数多くある。彫刻で有名なのは、日本三人美祭高山の塚台（山車）、春祭りに出る、上三之町下組の麒麟台に我国最古の地鶏の彫刻がある。飛騨の名工で谷口与鹿が、四才の折り元禄年中（一六八八—一七〇四）毎日、城山に行き群童と喜戯しながら、つぶさにその姿態や動作を観察して、唐子と鶏をモデルに、櫛（ケヤキ）の一本をもって、籠と

その中の鶏をえぐりぬき彫りにした精巧無類の神技の傑作、約二百五〇年以上前の地鶏の姿がある（写真参照）。

絵の方では、下三之町、八貴民俗美術館蔵に、駒井源崎（丸山応挙弟子）が寛政年（一八〇〇）に画いた花鳥画がある。見事に描かれた岐阜地鶏で、昔の羽色、体型を知るには、良い参考になる。（写真参照）

今岐阜地鶏も放し飼いであった鶏を、場所の無い事と、農作物を荒す為箱飼いする人が多く、尾羽が規定の四十五度以上に上り過ぎたり、体が太くなったり昔の地鶏本来の姿と変わりつつある。頭冠の大きくなるのは飼料が良くなった事と箱飼いにして大切に育て過ぎの精もある。

地鶏は動物食は絶対に与えず、粗食を与え風雨にさらし昔の地鶏の姿を作るため岐阜地鶏保存会の百二十余名の

昭和五十二年八月十日

全国日本鶏保存会機関誌

日本鶏 21号

編集人 鷲見善一

発行人 百瀬親夫

発行所 東京都国分寺市戸倉

〒一八五 全国日本鶏保存会

振替 東京 五十九七二